

原 寛*: 東亜植物注解 (10)**

Hiroshi HARA*: Comments on the East Asiatic plants (10)

38) **Sambucus Hookeri** Rehder 本種はこれまでヒマラヤ東部からアッサム、ビルマ北部に分布することが知られていたが、中国西部にも産することが明らかになった。1980年私が雲南省昆明西山で採集したものは、花序に微細な硬毛を密布し、花はほぼ無柄、蜜腺は小形でソクズとは異なり、ヒマラヤ東部産の *Sambucus Hookeri* の基準形と比べよく一致する。

Sambucus Hookeri Rehder in Sarg., Pl. Wilson. 1: 308 (1913)—Hara in Fl. E. Himal. 319 (1966); in Enum. Flower. Pl. Nepal 2: 197 (1979).

West China. Yunnan: Shi-shan, Kunming, ca 2300 m (H. Hara, June 7, 1980, fl., TI).

Distr. E. Himalaya (Nepal to Bhutan), Assam, N. Burma, and West China.

39) タカネツメクサ属 中井博士 (1929) が日本産のタカネツメクサ属 (*Minuartia*) をまとめられてから、日本ではずっとこの属名の下で扱われてきた。この属のものは蒴果が3片に裂けるので、蒴果が6裂する近縁のノミノツヅリ属 (*Arenaria*) と区別する。また日本産では前者は針状の葉を密につけ、後者は幅広い葉をつけているので分り易く感じられる。しかし1931年私は樺太に行って、当時 *Arenaria capillaris* Poir. var. *glabra* Fenzl (カラフトツメクサ) および *A. capillaris* var. *glandulosa* Fenzl (スプリポツメクサ) と呼ばれていた2植物 (本誌 5: 38, 1928 参照) を採集し、共に針状の葉をつけた両者が蒴果の形質によって前者は *Arenaria*、後者は *Minuartia* に属すること知って驚いた (本誌 13: 933, 1937 参照)。それ以来私はこの両属の関係について深い関心をもち続けてきた。Fernald (1919) はこの問題を詳しく検討して、*Arenaria* を広義にとるべきであると結論している。

一方欧米でも *Minuartia* はかなり広く用いられ、1962年には McNeill はこの類全部を再検討して *Minuartia* 属の限界をはっきりさせようと試みた。しかし蒴片の数以外にはっきりした区別点は見出されず、両説が入り交ってとりあげられているのが現状である。他方では Löve, A. and D. (1975) のように現在用いられている *Minuartia* 属も不自然で異質なものが交っているとして、基本染色体数を考慮してこれを更に6属

* 東京大学 総合研究資料館植物部門。Department of Botany, University Museum, University of Tokyo, Hongo, Tokyo.

** 本誌 57: 125-128 (1982) から続く。

に細分する見解を出しているが、これには賛成できない。

日本でも特にナデシコ科を専攻された水島正美博士は本誌 37: 242 (1962) で、「属名に *Minuartia* をとらぬ理由は別の折に述べる」と書かれて合一説を支持されたが、残念ながら博士はこのことを詳しく書かずに他界されてしまった。最近 Wofford (1981) も北米東南部産の *Arenaria* の種子を走査電顕で精査した結果、種子の表面が滑かなものから疣状突起のあるものなど色々な特徴を観察しているが、蒴片の数との相関関係は見られず合一説を主張している。

多年の懸案であるが、蒴片の数だけを唯一の区別点としてこの多形な属を分けることは私も無理と考えるので *Arenaria* に合一する説に賛成する。この場合次のような新組み合わせが必要になる。

***Arenaria* L.**, Sp. Pl. ed. 1, 423 (1753); Gen. Pl. ed. 5, 193 (1754)—Fernald in *Rhodora* 21: 1 (1919)—Maguire in *Amer. Midl. Nat.* 46: 493 (1951)—Wofford in *Syst. Bot.* 6: 126 (1981).

Minuartia L., Sp. Pl. ed. 1, 89 (1753); Gen. Pl. ed. 5, 39 (1754)—Mattfeld in *Engl., Bot. Jahrb.* 57 (Beibl. 126): 27 (1921); in Fedde, *Repert. Beih.* 15: 2 (1922)—Nakai in *Bot. Mag. Tokyo* 43: 455 (1929)—McNeill in *Not. Bot. Gard. Edinb.* 24: 133 (1962); in *Rhodora* 82: 495 (1980).

1) ***Arenaria arctica* Steven ex Seringe** in DC., *Prodr.* 1: 404 (1824).

Minuartia arctica (Steven ex Seringe) Graebn. in Aschers. et Graebn., *Syn. Mitt.-Europ. Fl.* 5(1): 772 (1918)—Hara in *Journ. Fac. Sci. Univ. Tokyo* III, 6: 43 (1952).

Lidia arctica (Stev.) Löve et Löve in *Bot. Notis.* 128: 510 (1975).

var. ***arctica*.**

Distr. Arctic Europe, Russia, Siberia, C. Asia, Mongolia, Manchuria, N. Korea, Hokkaido, Aleutian, Alaska to west Mackenzie.

var. ***hondoensis*** (Ohwi) Hara, comb. nov.

Minuartia arctica var. *hondoensis* Ohwi in *Acta Phyt. Geobot.* 3: 82 (1934)—Hara, l. c. 43 (1952).

M. hondoensis (Ohwi) Ohwi in *Acta Phyt. Geobot.* 5: 148 (1936); *Fl. Jap. ed. Eng.* 425 (1965).

Distr. Central Honshu.

2) ***Arenaria macrocarpa* Pursh**, *Fl. Amer.* 1: 318 (1814).

Minuartia macrocarpa (Pursh) Ostenfeld in *Meddel. om Grøenl.* 37: 226 (1920)—Hara, l. c. 43 (1952).

var. ***Jooi*** (Makino) Hara, comb. nov.

Alsine Jooi Makino in Bot. Mag. Tokyo 17: 12 (1903).

A. macrocarpa Fenzl var. *Jooi* (Makino) Makino, l. c. 17: 38 (1903).

Minuartia Jooi (Makino) Nakai in Bot. Mag. Tokyo 43: 453 (1929).

M. macrocarpa var. *Jooi* (Makino) Hara, l. c. 43 (1952)—Ohwi, Fl. Jap. ed. Eng. 425 (1965).

Distr. Central Honshu.

var. **koreana** (Nakai) Hara, comb. nov.

Alsine macrocarpa var. *koreana* Nakai in Bot. Mag. Tokyo 32: 36 (1918).

Minuartia macrocarpa var. *koreana* (Nakai) Hara, l. c. 43 (1952).

Distr. North Korea and Manchuria.

var. **minutiflora** (Hultén) Hara, comb. nov.

Minuartia macrocarpa var. *minutiflora* Hultén, Fl. Kamt. 2: 80 (1928).

Distr. Kamtchatka and North Kuriles.

var. **yezoalpina** (Hara) Hara, comb. nov.

Minuartia subfalcata Nakai in Bot. Mag. Tokyo 43: 454 (1929), excl. syn., quoad descr.

M. macrocarpa var. *yezoalpina* Hara, l. c. 43 (1952).

Distr. Central Hekaido.

3) **Arenaria verna** L., Mant. Pl. 1: 72 (1767); 2: 514 (1771).

Minuartia verna (L.) Hiern in Journ. Bot. 37: 320 (1899).

var. **japonica** (Hara) Hara, comb. nov.

Minuartia verna var. *japonica* Hara, l. c. 44 (1952)—Ohwi, Fl. Jap. ed. Eng. 425 (1965).

Distr. Hokkaido and North and Central Honshu.

40) **エゾタチカタバミ** 本種については本誌 24: 105 (1949) で詳しく述べたが、30年余を経た今日でもその学名はまだ安定していない。*Oxalis stricta* L. (1753) はその引用文献から 2 種の混合であると判断され、Small (1896) と Robinson (1906) は最初に引用されている Gronov., Fl. Virgin. 161 の基になった Clayton no. 474 (BM) の標本が北米産の *O. Dillenii* Jacq. と一致することを明らかにし、この標本を *O. stricta* の基準標本に選んだ。一方エゾタチカタバミには *O. europaea* Jordan (1854) を採用し、Wiegand, Fernald, Gleason などにもこれに従った。しかし Eiten (1955) は Linné の引用した Morison, Hist. t. 17, f. 3 の図はエゾタチカタバミと思われるのでこれをタイプとして、*O. stricta* をエゾタチカタバミの学名として用いるべきであるとの見解を出した。Robinson 等によってはっきりと lectotype 標本が選ばれ 50年以上も経てから、古い図を基にするようにその変更を主張することは、植物命名国

際規約第8条に反すると思われる。その後 Young (1958 & 1968), Jansen (1964) などもエゾタチカタバミに *O. europaea* を採用しており, *O. stricta* を用いる人は少なくなったように思われる。なお *O. stricta* L. (*O. Dillenii*) は近年日本にも帰化し, オッタチカタバミの名をつけられているが, エゾタチカタバミとはかなり異なった種である。

このようにエゾタチカタバミの学名には *O. europaea* がよく用いられているが, 1949年に私が指摘したように, 中国北京から記載された *O. fontana* Bunge の方が21年も早い名である。私はその Isotype を見てこの同定を確かめたのでここにその写真 (Fig. 1) をそえて, もう一度エゾタチカタバミの正名が *Oxalis fontana* Bunge であることを明らかにしたい。

***Oxalis fontana* Bunge**, Enum. Pl. Chin. Bor. 87 (1833)—Hara in Journ. Jap. Bot. 24: 105 (1949); in Journ. Fac. Sci. Univ. Tokyo III, 6: 82 (1952); Enum. Sperm. Jap. 3: 10 (1954)—Kitam. et Murata, Col. III. Herb. Pl. Jap. 2: 85 (1961)—Ohwi, Fl. Jap. ed. Eng. 580 (1965).

Oxalis stricta L., Sp. Pl. ed. 1, 435 (1753), quoad Morison, excl. Gronov.—Knuth in Engl., Pfl.-reich IV-130 (Ht. 95): 143 (1930), cum var. *europaea* (Jord.) et var. *fontana* (Bunge) Knuth—Gorskova in Fl. URSS. 14: 78 (1949)—Eiten in Taxon 4(5): 99 (1955)—Ohwi, Fl. Jap. ed. rev. 823 (1965).

Oxalis europaea Jordan in F.W. Schultz, Arch. Fl. Fr. et Allem. 1: 309 (1854)—Wiegand in Rhodora 27: 135 (1925)—Fernald, Man. 945 (1950)—Gleason, III. Fl. NE. U.S. & Can. 2: 455 (1952)—Young in Watsonia 4: 58 (1958); in Fl. Europ. 2: 192 (1968)—Janchen, Cat. Fl. Austr. 2 Erg.-Heft 48 (1964).

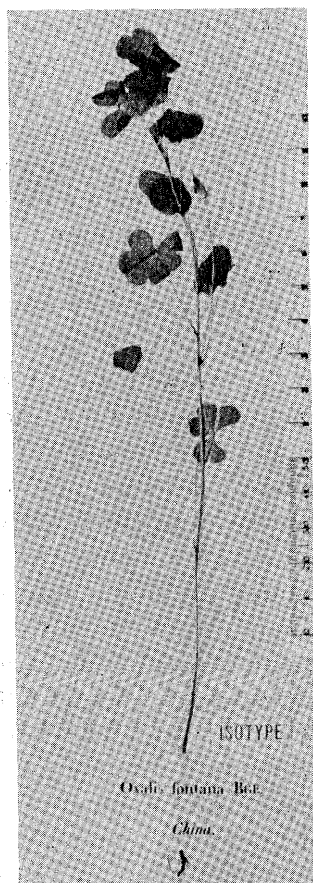


Fig. 1. *Oxalis fontana* Bunge, isotype in E.

Xanthoxalis fontana (Bunge) Holub in Bot. Közl. 59: 42 (1972)—Tzvelev in Nov. Syst. Pl. Vasc. 14: 180 (1977).

Distr. Temperate East Asia and North America, naturalized in Europe.

It seems to be reasonable to understand that Small (1896) and Robinson (1905) have carefully designated the specimen from Virginia (Clayton no. 474, BM) as the lectotype of *Oxalis stricta* L., and must be followed (Art. 8).

41) ハヤザキヒョウタンボク ウスリーから記載された *Lonicera praeflorens* Batalin (1892) の学名を、最初に日本産のものに当てられたのは中井博士 (1918) で、坂井辰三郎氏が1908年「越後国春日村」で採集した果期の標本に基づいており、その標本は今も東京大学に保管されている。しかしウスリー・満州・朝鮮など大陸産の *L. praeflorens* は原記載にもはっきりと書かれているように、若枝や花柄には腺毛を交えた毛がかなりあるが、日本産は枝や花柄が無毛平滑であるので変種として区別したい。

そうした場合に和名について多少問題がある。最も早く発表された名は、松村任三編改訂植物名彙後編 (1916) にでている '*Lonicera praeflorens* Bat. ヒロハヘウタンボク' であり、凡例に書かれているように朝鮮産については中井博士の意見でいれられたものと推察される。東大では朝鮮金剛山で中井博士が1916年に採集された標本にその名が書かれている。次に上記の1918年に日本産が報告された時に中井博士は「一にハヤザキヘウタンボクとも言う」と書き加えられた。しかし1921年中井博士が日本のスイカズラ科をまとめられた時にはどういう理由か分からないが、ハヤザキヒョウタンボクの和名だけが採用されていて、それ以後日本ではこの名が一般に広く用いられ今日に至っている。この和名は種名の *praeflorens* を訳したものととれるので、その意味からは大陸産の型に残すべきであるとの意見もなりたちうる。しかし和名の変更はできるだけ避けたいとの趣旨からいえば、日本産が知られた時に初めて出た名であることも考慮してハヤザキヒョウタンボクの和名を日本産に残してもよさそうに思える。和名については厳格な命名規約もないので、全くの誤りでない限り、ある程度慣用を尊重して分り易い名を用いることが大切なように思う。

もう一つ付け加えると、中井博士が最初の日本産地として記された越後春日村は誤りと思われる。上記標本のラベルをみると「春日村 (越後?)」と記されているが、春日村は新潟県中頸城郡と、長野県にもある。坂井辰三郎氏は1908-10年頃蓼科山附近で植物採集をされ他の植物の標本も残っているし、長野県の春日村附近では本種が所々で見出されている。一方新潟県からはその後本種は一度も採集されたことがないし、坂井氏がその附近で採集された記録も見つからない。したがって坂井氏の採品は長野県北佐久郡春日村 (今は望月町) 産であると断定してよいと思う。

Lonicera praeflorens Batalin var. **japonica** Hara, var. nov.

Lonicera praeflorens Batalin sensu Nakai in Bot. Mag. Tokyo 32:(145) (1918);

Tent. Capr. Jap. 90 (1921), quoad pl. ex Hondo; Tr. & Shr. Jap. ed. 2, 667, f. 301 (1927) p. p.; in Journ. Jap. Bot. 14: 363 & 375 (1938) p. p.—Hara, Enum. Sperm. Jap. 2: 46 (1952)—Ohwi, Fl. Jap. 1107 (1959); ed. Eng. 841 (1965); ed. rev. 1267 (1965)—Fukuoka in Mem. Sci. Mus. Tokyo 3: 344, f. 23 (1970) p. p.—Kitam. & Murata, Col. III. Woody Pl. Jap. 1: 11, t. 2, f. 12; f. 4. 6-7 (1971).

Lonicera kaiensis Nakai in Journ. Jap. Bot. 14: 363 (1938).

Differt a var. *prae flore ns* ramulis et pedunculis glabris.

Type: Honshu. Nagano: Komoro-jōshi (K. Satō, Apr. 21, 1965, fl., TI).

Distr. Central Honshu (from Fukushima Pref. southwest to Nagano Pref.).

○ジャワ島のオンジヨム (小林義雄) Yosio KOBAYASI: Ontjom of Java Island (Plate VIII)

ジャワ島のアカパンカビ (*Neurospora sitophila*) を用いた食品オンジヨムは微生物学界ではよく知られている。しかし時代遅れの食品として姿を消しつつある。10年ほど前にボゴールを訪れた際には、生のオンジヨムをかついで売り歩くのを見かけたが、1980年の再訪に当っては全く見当らなかった。諸地方を巡っているうちに、やっとバンドンの下町の小さな店で探し出すことが出来た。これもそのうちに姿を消すかも知れないので、記録のため写真をとった。南京豆を砕き、澱粉を混ぜ、レンガ大のブロックにかため、これに上記のカビを繁殖させたのが生のオンジヨムである。カビのために淡紅色になっている。これを薄く裁断し、油であげ、センベイ状にして食べるのである。A 図は生のオンジヨム、B 図左方では油であげて居り、右に出来上がったものが重なっている。因みにこのカビは耐熱性が強力で、熱帯地方の焼畑に蔓延することが多い。また遺伝研究用に適している。(国立科学博物館)

Explanation of Plate VIII

- A. Raw ontjom.
- B. Sliced and fried ontjom.